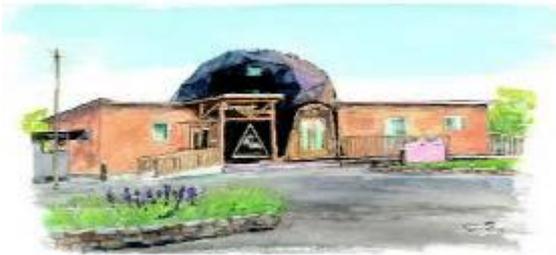


クローバーつうしん

CLOVER TIMES



2023年7月1日 第61号

公益財団法人 金森和心会
クローバー子供図書館 / 発行

〒963-8851 郡山市開成6-346-1

TEL/FAX 024-932-2118

<http://www.k-washinkai.or.jp/clover/clover.html>

「精神科医としての原点」

公益財団法人金森和心会 針生ヶ丘病院 非常勤医師
東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科
精神行動医科学分野

小泉 友紀暁

この原稿の依頼をいただき、私の読書への思い入れについて書くことができるのをとても嬉しく思います。なぜならば、私にとって読書は精神科医を志した原点そのものだからです。

幼い頃に触れた絵本のなかでは、『すてきな三にんぐみ』（トミー・アングラー／作・今江祥智／訳）の少しおどろおどろしい雰囲気や記憶に残っています。小学校に入ると、当時大流行した『ハリー・ポッター』（J.K.ローリング／作・松岡佑子／訳）や『ダレン・シャン』（ダレン・シャン／著・橋本恵／訳）に親しみました。多感な中高時代には海外古典文学に傾倒し、『車輪の下』（ヘルマン・ヘッセ／著・高橋健二／訳）や『武器よさらば』（アーネスト・ヘミングウェイ／著・高見浩／訳）は私の価値観に大きな影響を与えました。また、『ティファニーで朝食を』（トルーマン・カポーティ／著・村上春樹／訳）の純真無垢な世界観やみずみずしく洗練された文体に魅了され、そのなかの短編『クリスマススの思い出（A Christmas Memory）』を毎年クリスマススの時期に原文で読むのが、マイ恒例行事になっています。

さて、本題である私が精神科医を志したきっかけとなったエピソードについてお話ししようと思いません。将来の進路について考え始めていた高校時代、私は『文學界』や『群像』といったいわゆる文芸誌を図書館で読み耽る日々を送っていました。ある日、精神科医で作家の加賀乙彦の記事を見つけ、そこではじめて精神科医という職業を意識したのです。加賀は、『フランデルの冬』や『宣告』といった重厚な小説を発表していました。それを糸口に『どくと

るマンボウ』シリーズの北杜夫や『娘の学校』のなだいなだなど、作家でもある精神科医が数多くいることを知ります。「ひとの心情の機微を穿つことのできる精神科医ってどんな職業なのだろう」。私は文学を入り口に精神医学や心理学に強い関心を抱き、精神科医を志すようになりました。そして加賀が助教授を務めた東京医科歯科大学医学部に進学したのは、不思議な縁です。

いま、精神科医としてひとのこころに想像力を働かせ、病に苦しむ患者さんに寄り添えるよう日々努力を重ねています。私が仕事で疲れたとき、ひととひとの安らぎをくれる息抜きもまた小説です。毎月発行される文芸誌を当直中の休憩のお供にしています。『乳と卵』の川上未映子や『蹴りたい背中』の綿矢りさなど、現代の文壇では女性作家の活躍がめざましく、読み応えがあります。『推し、燃ゆ』の宇佐見りんは、現代に生きる少女の複雑で脆い心境の表現が巧みで、衝撃の連続です。私にとって小説とは、自分の狭い価値観を広げてくれる「広角レンズ」のような存在と言えます。

残念ながら私自身に小説を生み出す文才はないのですが、得意のフランス語を活かして翻訳という形で「本」の世界に関わることができています。人工知能による翻訳技術が発達した現代では、外国語を学ぶことに労力を費やす意義は少ないと思われるかもしれませんが、しかし、イタリヤの映画監督フエデリコ・フェリーニは「違う言語は人生の違う見方だ」と述べました。まさにその通りで、フランス語の書籍に触れるたびに新しい価値観に出会うことができ、楽しみは尽きません。

このように私に精神科医という一生の仕事を教えてくれた本の世界は、これからも新しい視野を与えてくれる大海原なのです。



「すてきな三にんぐみ」
トミー・アングラー/さく
いまえよしも
やく (偕成社)



「ハリー・ポッター
シリーズ」
J.K.ローリング/作
松岡佑子/訳
(静山社)

